

命の原動力

薩摩川内市立祁答院中学校 一年 久保優奈

今、この作文を読んでいるみなさんは、毎日水を一滴たりとも無駄にせず生活できていると言えるだろうか。私はとてもそうとはいえない。しかし世界には、水を一滴たりとも無駄にしてはいけない人々だけがいる。綺麗な水を無駄にしている人と、綺麗な水が使えない人がいて、それでも「私たちの生活に水は足りている」と言えるのだろうか。

実際、地球上の三分の二を水が占めている中で、人が飲める水は0.01%しかない。しかも、その貴重な水が地球温暖化や人口増加が原因で減ってきているという。私がこの現状を知ったのは、小学三年生頃のことだ。蛇口をひねれば当たり前前に水が出てくるこの日本で、「世界で水が不足している」と岩手も、あまり実感がわかなかつた。しかし、泥水とも言えるような汚い水を当たり前前に飲んで、いる外国の子供の映像を見て、どうしよう

もなく胸が痛んだ。同時に、自分が情けなく思えてきた。私が水を無駄にしている間にでも、汚い水を飲んだことで亡くなった人がいると思うと、申し訳なさいになる。しかしそんな現状を、個人の努力だけで変えることができない方法がある。それが、節水だ。私は以前まで、節水が水道代が安くなる以外にどのような効果があるのかわからなかった。節水は、もちろん水道代が安くなるという利点もあるが、一人一人の意識次第で二酸化炭素の総排出量を減らすこともできる。水を処理することで排出される二酸化炭素の量と、処理する水の量を同時に減らすことができるのだ。

一口に節水と言っても、さまざまに取り組みがある。私には、食器や手を洗うとき、歯磨きするときなどに、蛇口から水を出しっぱなしにしてしまう癖がある。それは、今すぐにも直すべき、良い癖とはとてもいえないだろう。私の場合、その癖を一ヶ月間直すだけ

でも「節水」と言えるだろう。他にも、お風呂の残り湯の活用や、蛇口から出す水の太さを、「鉛筆一本分」にするように心がける、などが代表的だ。学校でできる取り組みとしては、タオルや雑巾をすすぐときはバケツにくんだ水をつかう、花壇などの水やりは、雨水をつかう、などが挙げられる。

世界中に安全な水をトイレを届けることは、SDGsの目標の一つにもなっている。SDGsという認知度が高い目標にすることで、国内の企業も達成に動いている。例えば、飲料水を販売しているサントリーホールディングス株式会社は、衛生的な水を生成できる森の保全活動、株式会社LIXILは、ユニセフとパートナーシップを結び、アジアやアフリカの学校等を中心に病気の感染や悪臭を防ぐ簡易トイレの提供などの取り組みを実施している。

「水」についての学習で印象に残っているのは、小学三年生のときに浄水場を見学に行っ

たことだ。そこでは、見たこともないほど大きな機械や、働くたくさんの人々の姿があった。その光景から、私たちがいつも生活にかかっている水には、莫大な費用と人の力がかかっていることが分かった。

このように、私たちの手元にある綺麗な水は、たくさんの人の努力によって作られておる。水は、命の原動力でもあり、ときに災害として猛威をふるい命をうばう存在でもある。そんな「水」と向き合っていくために、また、発展途上国の人々や、後の世代に綺麗な水を届けるために、自分にできる節水への取り組みや、水への関心を高めること、周囲へ水の大切さを訴えることなど、小さなことを積み重ねていきたいと思う。「命の原動力」の水を絶やさないうよう、自分のこととして考えていきたい。